

川原 功司著

『英語の諸相…音声・歴史・現状』

名古屋外国語大学出版会、二〇一九年

佐藤 雄大



英語好きになる良質のガイドブック

「……」

「どの単語の意味がわからない?」

「先生、Tの過去形はどう訳せばいいですか?」

私は十四年間愛知県公立高校で英語教員として勤務していたとき、英語に関して生徒といろいろやりとりしてきたが、今でも鮮明に覚えているやりとりが夏期講習の授業の中の冒頭のものである。今と違いクーラーのない蒸し暑い教室で夏期補習しているとき、おそらく「Ted runs faster…」のような英文をM君を指名して、和訳するように言ったとき彼から出た質問だった。「テッドは」の和訳を期待していた私は、はじめ彼が何を聞いているかわからなかったが、彼は「Ted」を「T」の過去形だと考えて、どう訳せばいいか悩んでいたということだった。

今考えれば、この彼の質問からいろいろな話題に膨らませて、英語について話が出来たはずだが、新任三年目の当時の私はそうした余裕もなくおそらく「TedはTの過去形ではなく、人の名前のテッドだよ」と「面白みのない」対応をして終わってしまったと記憶している。

ただ「余裕がない」というのは正確ではなく、今から考えれば「知識がなかった」から話題を膨らませられなかったというのが正解だろう。自分自身が受けてきた英語の教育をそのまま受け取り、その内容を現場で再生産する

ことが「授業」だと思いついていた当時の私は「T」（あるいはアルファベット）に歴史があり、「過去形」（あるいは英文法）にも歴史があることは思い浮かばなかった。

今回川原功司氏が上梓された『英語コアカリキュラム対応 英語の諸相…音声・歴史・現状』（NUE英語教育シリーズ）には、上記のような素朴（ただ今から考えてもトリッキーな質問ではあるが）な質問にも、それをきつかけに様々な観点から「英語」を語ることができる豊富な知識が満載されている。本書では音声学、音韻論、英語史、英語の現状・World Englishesまで「英語学」に関する項目がしっかりと押さえられていて、「序」で筆者が述べているように文科省が提示した新しい「英語コアカリキュラム」の発想を汲んで本書が展開されているのもこれからの大学教育においてとても参考になる著作と言っていいたいだろう。

もちろんそれぞれ音声学、音韻論、英語史などは独自の学問分野を形成していて、本来ならコンパクトに一冊にまとまるものではないが、そこは著者の能力で、それぞれの分野で必要にして十分な知識を厳選して解説している。またその解説が初学者にもわかりやすく書かれているのが、この著作の大きな魅力ともなっている。そのわかりやすさの一因は、著者が「あとがき」に書いてあるように、本書の内容が「講義のハンドアウトから発展したものが、受講者の皆さんからいただいたフィードバックもたいへん、有意義だった」とあるように学生に説明する中で初学者にとって何が理解しやすく、どこに理解の難しさを感じるかに関して、実際の受講生とのやりとりを通しての著者の経験が基礎にあり、その経験が遺憾なく本書の内容に反映されている。こうした初学者向け（とは言ってもかなり高度な内容も含むのだが）の当を得た英語学の書籍はありそうでないのが現状であり、英語専攻の大学生のみならず、広く多くの読者を得ても不思議がない。例えば「なぜ十月なのに八を表すeightが使われているか」など、英語にまつわる豆知識が書籍全体に配置されているのは、英語好きな人にとってはたまらないのではないかな。望むべくは、さらにこれから著者が授業で学生に教える中で気づいたことなどを含めてさらなる改訂をしていただき、より充実した内容の書物となることを期待する。また外国語大学の出版会が発行するという点を考えるとそういう役割も求められるような気がする。